

<年長組 2015年度年間目標>

- ・希望をもって生きる
- ・他者と共に生きる

<一学期の保育の視点(願い)>

- ① 礼拝を通し、復活されたイエスさまが今も私たちと共にいて下さることを知る。
- ② 自分のやりたい遊びにじっくり取り組み満足感を味わう。それと共に体験を広げる時を持つ。
- ③ 友だちと遊ぶ中で、意見を出し合い、譲ること、心を合わせることを体験する。
- ④ 集う中で、うたうこと、表現すること、ルールのある遊び、からだを動かすこと等を楽しむ。
- ⑤ 自分の身の回りのことを意識を持つてする。
- ⑥ 五感を使って春から夏の気持ちの良い季節を感じる。

年長組の生活が始まってから一ヶ月が経とうとしています。大きい組になることを楽しみに待っていた子どもたちは、毎日張り切って過ごしています。

カメの世話

— 2015年度年間目標 ・他者と共に生きるより —

ある日登園してきたAちゃんは私の所へやってきて、「先生、大きい組になったからカメのお世話できるよね？」と聞きました。年中組の終わりに、年長組の子どもたちから「カメのお世話をよろしくお願いします」と頼まれたことをAちゃんは覚えていたのです。私が、「そうね、ミドリとジョイのお世話をお願いされていたわね」と言うと、Aちゃんは嬉しそうに「うん、ぼく、お世話をするの楽しみにしていたんだ」と答えました。その日、私は、Aちゃんとお弁当の後に、カメの世話をする約束をしました。

午後になり、Aちゃんは同じようにカメの世話をしたいと言っていたBちゃんを含む何人かの子どもたちと、庭に出て来ました。AちゃんとBちゃんは、ジョイの世話、他の子どもたちはミドリの世話をすることになりました。

まずAちゃんとBちゃんは、ジョイが入っているベビーバスを廊下から庭へ出しました。

Aちゃんは「先生、次はどうするの?」と聞くと、Bちゃんは「私知ってるよ、ジョイのお家をきれいにするんだよね」と言いました。私が、「Bちゃん、よく知っていたわね」と言うと、「前に大きい組がしてるの見てたもん」と得意げです。ジョイの家をきれいにするには、ジョイを別の場所に移動させなくてはなりません。私はジョイを入れておくためのたらいを用意しました。Aちゃんは少しドキドキしながら両手でそっとジョイの体を持ち上げてたらいに移しました。それから2人は、カメ用のたわしで、たらいをゴシゴシ磨きました。

掃除の後には2人が楽しみにしていた、ジョイを散歩させる時間です。私はカメをお散歩させる時の約束を2つ伝えました。1つ目はカメの行きたい方向に行かせてあげること、2つ目は周りにいる友だちや小さい組がカメに気が付かず、間違っただんでしまわないように、守ってあげてくれることを伝えました。それから、ジョイを庭の芝生の上に連れて行きました。Aちゃんは「ジョイ、いっぱい歩いていいからね」と言い、そこにしゃがんでジョイの動きを見守ります。やがてジョイが歩き始めると、「動いた動いた」と言って2人は立ち上がり、周りから守るために両手をひろげ、ジョイを囲みながら、一緒に歩き出しました。「僕たちが守ってあげるから好きなところに歩いていいからね」とAちゃんは、ジョイに話かけます。「でもジョイはぼくの言葉分かるかな?」とAちゃん。「えーカメは人間の言葉は分からないんじゃない?」とBちゃん。「そっかー」とAちゃん。この後も2人はカメを散歩させながら、ジョイに話しかけていました。



大きい組になりたての子どもたちにとって、今はカメの世話が目新しい遊びのひとつとも言えますが、責任をもって最後までやり遂げ、「いのちを守ることは大切なこと」と感じる体験の積み重ねとなるよう関わっていきます。

4月5月と遊びの中で、全員がカメの世話を体験した後は、順番に世話出来るよう“カメの当番“を始めたいと思っています。

「小さい組だから仕方がないね」

— 2015年度年間目標 ・他者と共に生きるより —

Cちゃんが、Dちゃんと一緒に庭で『お肉屋さん』を始めようとしていました。年少組の前のベンチの前にすのこを持って来て、肉に見立てたちょうどいい石を見つけるとすのこに並べていきました。「じゃあ焼こうか」とCちゃんが言うと、Dちゃんは持ってきたすのこを立てて囲いを作り、焼き始めます。「あーいい匂いがしてきたね」と2人はにっこり笑いました。するとCちゃんは「もっとお肉見つけてこよう」とDちゃんを誘い、2人はその場から離れました。

そこへ年少組のEちゃんがやってきました。Eちゃんは並べてある石を見ると、石を手にとりました。すると、石を取った手がちょうど立てかけてあったすのこに当たってしまい、すのこがバタバタと倒れてしまいました。するとそこへCちゃんとDちゃんが戻ってきました。その光景を見て思わず「あ！」と声をあげるCちゃんとDちゃん。以前の2人であれば「壊れちゃったじゃない！私たちが遊んでたのにー！」とふんぷん怒っていたことでしょう。私は2人がどうするかを少し見ていることにしました。

「壊されちゃったねー」とCちゃん。「うん」とDちゃん。するとCちゃんは一度、小さく深呼吸し、「小さい組だから仕方がないよ、また作り直そう」と言いました。そしてCちゃんは小さい組のEちゃんの所へ行き「あのね、ここは私たちが使っていた所だからもう壊さないでね」と伝えていました。私は2人の所へ行き、「前の2人だったらふんぷん怒ってしまったでしょうが、怒らずに伝えられたわね」と言いました。するとCちゃんは「だってもう大きい組だから、こんなことで怒らないよ」と言い、Dちゃんも「ねっ」と相づちをうちました。それからすのこをまた直し始めました。

私は2人の心の成長を嬉しく感じていました。子どもたちは一番大きい組になったことにより小さい組に対しての思いやりを表せるようになっていきます。もちろん「小さい組の子どもたちだから」と譲らなくても良いことや譲れないこともあります。そのことは分かっただけながら、支えていきたいと思っています。



(安東 直緒)